
暁に羽ばたく鷹の宿木

花純弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暁に羽ばたく鷹の宿木

【Zコード】

Z6116F

【作者名】

花純弥生

【あらすじ】

短編でもあり、続るものでもあつたりする「ナルト」のお題挑戦
小説。題名はその通りで「暁」と「鷹」と「宿木」です。宿木の意味は木の葉だと思って下さい。シリアルスメインですが時々ギャグになるかもしれません。白鶲番外編も掲載する予定。小説技術向上を目指した小説もあります。お題を借りたサイト様にはあとがきや前がきのところにサイト名などを書き記しておきます。少しグロアリ。ただし性的なものは一切ありませんし、BLもありません。

【令】話「暁に全て溶かし込む」（前書き）

この小説は一次創作作品です。

出版社とは一切の関係がありません。

【令】話「暁に全て溶かし込む」

この組織に入つて幾年の時が経つただろうか。

うちはイタチは桜の木を眺めながらぼんやりと考へる。

今は四月の中旬。

桜の花がそろそろ咲き乱れはじめ、イタチの頭にも似合わなく、
桜の花が付いていた。ふわりふわりと桜の花たちが散っていく姿を、
イタチはどこか儂げに見えて思わず桜の花びらに手を伸ばす。

「何をしているんですか」

突然、背後から気配を感じ取つた。いや、最初から感じ取つてい
た。

振り返ると愛刀鮫肌を真つ赤に染めた鬼鮫が立つていた。自分の
身には血の一滴も付いていない。

イタチも鬼鮫も、血が付着する事を嫌う。

衛生的にも気持ち悪いし、臭いで足取りがバレる場合があるから
だ。

鬼鮫はどうだか知らないが、イタチにはもう一つ嫌う理由がある。
ただ純粹に、自分を殺した忍の肉片を残したくないからだ。まる
でそれがその忍たちの想いのよつな感じがして。
だからよく言われる。

『イタチさんには血は似合いませんね』と。

木の葉に居た時も同じだ。

でも、あの時とは少し理由が違つた。あの時は弟のサスケに血の
臭いを感じさせたくなかつたからだ。

イタチがこの世で最も愛し、狂愛を捧げる弟、……。サスケも確かに桜の花が好きだったような気がする。といつより、うちは一族全員が桜の花を愛していた。

うちは一族の特性といつのであるうか。

家には桜の大木が咲き誇っていた。暗部の任務帰り、時に憎らしく思ったものだ。それがまるで「己」が手で殺した忍たちの魂のようだから血を洗い流す。

血を付着する事を嫌う。

少しでも罪から逃れたいから。なんとも身勝手な理由だ。暁の中でも俺だけが罪を受け入れられないな……とイタチは自嘲気味に笑うことしかできなかつた。

鬼鮫は訝しげにイタチを見つめると、「桜の花、ですか」と興味のなさそうに呟いた。

「よく武士の散り様と例えられますね……私たち忍には関係のない事ですが」

「……それは違う」

イタチはもう一度桜の花に手を伸ばす。今度は逃してしまわないよつて。

罪を受け入れるというのはどういう事なのだろう……と、イタチは花びらを手に包んだ時思つた。

「己の罪は許されるものではない。

いくら里がためとしても、命を奪つてこうことは世界を奪つこと。幾百の人々の「世界」を奪つてきた。

神がもしも居るのならば、許さないだらう。罪を受け入れないのならばなおさらだ。

「桜の花は時に、忍の魂としても例えられることがある」

「魂、ですか……？」

イタチは手を大きく振り上げる。

今、夜が明けようとしている。暁の空がイタチの白くて細い腕を輝き映す。

罪を受け入れるということはすなわち、暁に溶け込むこと。自分を悪だと認め、漆黒の衣を身に包むこと。体も、心も。

その通りさ。

俺は悪人。

一族郎党皆殺しにした類を見ない大悪党。その上暁に溶け込み、人々の命を死神のように狩りとる化け物。血の瞳を宿し、化け物。

桜の花言葉は……

「純粹、淡泊……か」

誰がどう見て俺を純粹と言うのか。誰がどう見て俺を淡泊だとうのか。欲にまみれ、暁に心を任せたこの俺を……。手に包んだ桜の花びらをぱっと、イタチは手放す。

(お前は穢れるな)

桜の花が一瞬サスケの姿に重なつた。

だから、穢れるなど一言命じる。兄として。

ほら。

欲にまみれている。今でも自分はサスケの弟だと思っているんだ。
なんて、傲慢。なんて、愚かなこと。

桜の花びらは暁の空へと舞い上がり、太陽が昇るまで風に舞い続
けていた。

【令】話「曉て全て溶かし込む」（後書き）

<http://zision.jez.jp/dressy>

「味付けタイトル集」様からお借りしたお題です。

【三】話「不信心」（前書き）

土の中の飛段のお話です。「白雞」に繋がる伏線も含まれています。
赤い瞳とは一体誰でしょうか？

【三】話「不信心」

この世に本当の不死などいない……。角都はそんな事を言つていた。

アンタは心臓全てやられたらお終い。

でも俺は？

俺は不死じやない。それだけは断言できる。……不死身という言葉は本来、「最強」……そういう意味で使われていたらしい。

だから俺は不死じやない。

不死だつたらこんな地中に埋まつているはずがない。あんな小僧一人に【暁】である俺がやられるはずがない。

俺は昔から弱かった。

一般の忍と比べられるほど落ちていなが、少なくとも暁の中では一番弱かつた。俺より強い連中も、暁の部下の中には居た。でも角都は俺をパートナーにする事を文句言いながらも許し、弱い俺の修行にも付き合つてくれた事があった。

いくつもの大罪を犯した俺。ジャシン様の教えに背いた事も幾度もあった。この世の道理を破壊するジャシン教の教えを破壊する俺つて……いくら暁がJランクのやばい連中だとしてもこんな厄介な俺を仲間に入れることなんてなかつたんじやないのか。

今でも覚えている。

あれは確か桜が散りゆく頃だつた。ある日突然リーダーが押しかけてきて俺の日常をぶつ壊しにした。

俺の居た研究所は、俺の体を日々実験する俺にとって忌まわしいもの。でも諦めていた。俺は最強じやないから。だから抜け出せない運命の牢獄に、諦めた。

俺の周りには屈強な忍たちが幾人も監視していて、俺の両手両足には俺を拘束するための……チャクラを封印するための鎖が付けられていた。

なんて惨めな姿。

でもそれでもいい。

俺は最強じやないから。だから逃げ出せない……そう覚悟を決めていたのに、あの人はぶち壊しにした。たつた三人で、三分で一つの研究所を掌握してしまうほどの実力の持ち主たちが俺の全てをぶち壊しにした。

印象的だった。

俺の周りを取り囲む忍たちが次々に無惨に殺されてゆく。俺は動けない。全てを拘束されているから。ただその光景を呆気に取られながら見ていただけだった。

ある者は黒い触手により首を絞められ惨たらしく殺され、ある者は赤い瞳に狂い仲間を襲う。そしてある者は敵に触れる事も敵わず、ただ音もなく殺されてゆく。

幻想的な風景。

俺は思わず声を出していた。「何の用だ」……と。

俺の居た研究所はかなり広く、里の全ての情報を掌握している特別施設もある。そのため常に百人以上の忍が待機しており、俺は人体実験の中でも別格として扱われ一番情報の中枢に近い場所に居た。

だからこいつらはこの里の情報が目的なんだろう、と俺は思った。そんな俺の思いがリーダー格である金髪の男に伝わったのか「違う」と一言呴いた。

『こんな里には興味がない』

そして男は続ける。「興味があるのはお前だ」と。

それで俺は思わず噴き出してしまった。なんて面白い奴なんだ、

と。

「俺の不死が興味あんのか？ だつたらお生憎様。俺は不死でもなんでもねえ、ただの弱いクナイの握り方も知らねえ奴だ」

男は俺に歩み寄り一言呴ぐ。「この世に不死は存在しない」と。俺はまた噴き出していた。

「お前らが不死じゃなくて、最強じゃなくて誰が最強だよ？ こんな強え奴見たの初めてだぜ」

男も声を出して笑いだす。

俺も笑いが止まらず、じばらくの間笑い続ける。

『面白い奴だ。……角都、お前の相方には丁度よさそうだ』

角都と呼ばれた男は不快そうに目を細めると、

『俺は金の稼げる奴以外興味は無い』

と真顔で言いやがつた。またもや俺は笑いだす。

「宗教は金になるぜえ？」

そんな事を言つていた。

ジャシン様への最大の冒とくなのに、俺は男と同じようじに真顔で言つてやつた。男はまた口を細めると「面白い奴だ」とただそれだけを呴き背を向ける。

『俺と組んできた相棒は皆死んだ。……覚悟しておけ』

」の一言が俺と角都とがパートナーを組むきっかけになった。金髪の男は愉快に笑いながら俺の拘束を外していく。俺を自由へと導いていく。

あれから五年間。

俺はずっと自由だった。

全てを許された。

今でも忘れない。……絶対に。

自由になれたのにいつの間にか地中の中でゾンビのように埋まっている。また拘束だ。……もう一度と外の空気を吸う事はないだろう。

慣れた。

もう慣れている。

でも。

あの時みたいに救いは来ないんだな。永遠に、久遠に。このままなんだ。

さあ。

ジャシン様。

俺に罪の裁きを。

不信者にはこんな最後がお似合いだぜ。

【三】「話」不信心（後書き）

お題は「<http://tearsbaikotoba.jp/>」より借りて参りました。

【朱】話「好きな花は」（前書き）

お題はなしです。

その代わりに花言葉を用いています。小南とイタチのお話。

【朱】話「好きな花は」

偶然だった。

いつもの様に、暁の任務を終わらせ自分たちのアジトに戻りうつとして矢の国国境付近の田舎道を歩いていた。

鬼鮫はない。

この程度の任務は一人でも難なくこなせる。人間という生き物は守るという行為より壊すという行為の方が簡単にできる。

人一人を守るのに最低でも一小隊は必要になる。敵の数は未知数。単独の可能性もあるし軍単位の人数を率いて奇襲してくる場合もある。

つまり守り方は常に緊張感が漂い、犠牲者が守る人数より増える。攻める方は守るもののが何にもないから失敗したら引き揚げればいい。でも守り方はそうもいかない。

戦つて、戦つて、最後の一人になるまで血みどろになつて戦い続けなければいけないという地獄を味わう。

皮肉なものだ……。

イタチは内心毒づき、空を見上げた。

憎らしいほど晴天。雲一つもない綺麗な真昼の大空だ。

だがイタチにはこの空が自分を嘲笑つてゐるかのようで、クナイの一つでも投げ出したくなつてくる。それをぐつと堪えるのも一苦労。

今朝から気分は最悪だった。

人殺しの任務には慣れた。

平和の里と呼ばれる木の葉でも人殺しを続けていたイタチだ。暁に入つてもそれは何ら変わりのない任務だつた。

でも人殺しはいけない事だと本能的に分かっている。例えどんな理由だとしても同種を減らす行為は人間しかしない行為だ。くだらない。

そう呟いてしまえばお終いだ。

でもイタチにはそれができなかつた。この世の平和を願うからこそ人殺しという罪の重さに耐えきれなかつた。イタチだつてまだ子供だ。団体だけが大きくなつて心はまだまだ子供だ。

泣きたくなる事もある。叫びたくなる事もある。でもそれを堪え、無感情を装い続ける。でも限度つていうものがある。

それが誰かに見破れていなか、イタチは不安だつた。

今自分の歩いている平和な道は、裏を返せば薄汚れた朱あかに染まつた道だ。だからこの矛盾が憎らしい。

「くそつ……」

拳をギュッと強く握る。

堪えられない。耐えられない。逃げだしたい。泣きたい。叫びたい。そんな思いを拳にこめた。……無意味だと知つても。

「イタチ」

不意に声が聞こえた。

完全に気を緩めていたイタチは不覚を取られたと思い、急いでクナイをポーチから取りだそうとするが手がすべつて中々取りだせない。

ここまで精神が動搖していたとは自分でも思えなかつた。

「何をそんなに焦つている」

対照に相手は冷静だ。

聞き覚えのある声にイタチはクナイを取るつとする手を止め、声のする方向へと首を向ける。

見知った顔。

そして、今一番会いたくないと思つた人物たちが居た。

「リーダー……それに小南さんも……」

呑気な田舎道には不釣り合いな暁のコートを羽織つた暁の首領ことペインとその隣に小南が立つていた。

イタチとの距離はざつと十メートル。これだけの距離を気づかなかつた自分に更に腹立たしく思つ。……それほど自分は、動搖していた。それを改めて気づかれる。

ペインと小南は少し顔を訝しめ、「どうした?」と尋ねて来る。事の元凶はお前らだ、と毒づきたくなるのを堪えイタチは「何でもありません。少し頭が痛かったもので」と適当に誤魔化そうとする。

だが、それを信じるペインではなかつた。

ペインは小南へと視線を向け、何かを小さくぼやく。風が強く吹き、イタチの耳には届かなかつたが小南は小さく頷くとイタチへと歩み寄つて来る。イタチは少し身構える。その姿を小南とペインは小さく笑う。

でも決してその笑みは嘲笑うかのような空の晴天とは違い、柔らかさが含んでいた。

「お前もまだガキだな……。面白いものが見れた。任務御苦労」

とペインは言い残すといつの間にか姿を消していた。イタチの写輪眼でも見透かせないその速さにイタチはため息を吐く。あの人に

はどんな手を使っても勝てない……そう思わされた。

「無感情な人でしょう」

小南は静かに咳く。その言葉には聖母のよつた響きがあり、母のよつた優しさがあつた。小南は確かに暁のメンバーで副リーダーでもあるが、暁内で唯一普通の人間に近い性格の持ち主だとイタチは知っていた。暁やペインに対しての執着は猛烈なものだが、それさえなければ普通の美しい女性……そうなる事をイタチも、暁のメンバー全てが知っていた。だからこそ珍しい。誰もが自我を壊さない小南に対して尊敬の思いを抱き、尊敬の証として「小南の姉さん」と呼ぶメンバーも少なくはない。

「それでもあの人はまだ人間よ」

まだ、という言葉に引っかかったがイタチは「どういう意味ですか?」と問い合わせていた。

小南は母のような笑みを浮かべると、

「忍だとしても感情を消す事は不可能でしょう? 現に貴方も感情の葛藤の最中に居た」

「…………」

静かな言葉。でも咎めるような事は一つも含まれていない音色だつた。
しばらくの間、お互い何も言わなかつた。

風が流れるように吹き、イタチと小南の髪を揺らす。小南はずつとイタチの赤い瞳を見つめている。そうなると自然にずっと小南の顔も見えるわけで、顔をそらす事が出来ずに時が流れゆく。

いつまで続くのだろうか。そんな事を始めた時、ふと小南が

口を開く。

「好きな花は何?」

突然の質問だった。

イタチは答える事が出来ずに言葉を詰まらせる。小南はイタチが見せた反応を当然のように受け取ると、瞳をイタチからそらすと空を見めた。

こうやってみると、どれだけ小南が美しい容姿を持っているのかが分かる。美しいラインの整った首筋、ほつそりとした顔は決して痩せこけているわけではなく、滲み出るような白い肌の色。例えるならイタチの好きな葛菓子のように透明な肌を持ち、人を惹きつける。髪はあくまで自然体に。大きな花飾りは決して彩ったものではなくて、彼女の性格を表わしているように見える。

「……私はどの花も好きだけれども、一番好きな花は紫陽花」

なるほど。とイタチは思わず納得してしまつ。彼女の髪の色は紫陽花の色によく似ている。そして雰囲気も紫に包まれた一輪の花びらのような、儂さを持っている。

「花言葉は『貴方は美しいが冷淡だ』……人のことを言つてい るかのよう」

あの人、というのはペインの事だ。

今小南の語つていてる事は一人の女性としての、言葉だった。

「紫陽花は唯一雨の中で存在感を漂わせる幻惑の花……。それでも、あの人は私の事は見てくれない」

「……何が、言いたい?」

敵意のこもっていない、自分でも驚くほどにイタチは優しい言葉を小南へと向けていた。小南の言いたい事はよく分かった。

私を見て欲しい。たつたそれだけの、儂い夢。

確かにあのリーダーなら猪突猛進に自分の道を進んで行くだろう。隣に居る相方の、彼女の存在も忘れて。イタチはそんな表情を小南

へ向けた。

貴方も、苦労しているんですね……。そんな感じの瞳で。小南は苦笑いにも似た笑みを浮かべると「でもね」と言葉を区切った。

「紫陽花の花言葉は女を悲しくさせるものばかり。でも、一つだけ希望を与えてくれる言葉があるそれは……」

元気な女性。

なるほど……とイタチは思わず声に出して呟いていた。

彼女がこうして自分に笑みを見せてるのは、この言葉からなのか。紫陽花という花の花言葉に妙に納得させられてしまった。

「イタチ……貴方の好きな花は何?」

小南の瞳には「私だけに答えさせておいて、自分だけだんまりなんて納得できなわ」となんども高慢な色合いが含まれていた。

「(そういえば紫陽花の花言葉に高慢という意味も含まれていたか……)」

可笑しくて自然にイタチの口元は緩む。

「俺の好きな花は……」

風が吹く。小南は笑い、イタチも笑う。

その笑みは小南は幼少の時のようなあどけない笑みで、イタチは木の葉に居たころの兄弟でじゃれ合つて居るような笑みだった。それが可笑しくて、二人して笑う。

先ほどまでの嫌な気持ちは何処へやら、イタチの黒くて深い瞳は青くて大きい空へと向けられていた。

田舎道に偶然見つけた茶屋でイタチはお茶を片手にのんびりと空眺めていた。任務報告など後でいい。

今、この瞬間の幸せを噛みしめていたかった。

「そう、か。……やはりイタチは面白い奴だ」

ペインはそう呟くと、小南の瞳を見据える。

元々はペインの差し金。イタチが矢の国居るという事を事前に全て知つていて、イタチの様子を全て相方である鬼鮫から報告を受けていた。

マダラの事も気にかかるので、イタチの元へと足を向けたら一人とも驚いた。前々から不思議な奴だとは思つていたが、今日見たイタチの姿はまるで子供だ。年相応に悩み、葛藤する姿にペインは不思議な感情を覚えた。

鬼鮫の報告とはあまりに違う、無防備な姿に不思議な感情を抱き、興味を抱いた。その心の奥底を見てみたくて、小南を差し向けて。自分ではダメだ。それくらい分かつていて。でも、小南ならイタチの本当の心を聞き出せる……幼馴染だからこそ分かる事だった。

ペインは一人の姿を草陰から見ていた。

小南が例えに花を出すとはそれだけでも面白かったのが、イタチの答え。

「椿、とはな……。それも赤椿か」

理由はこうだ。

自分は血に汚れている。でも、それでも望みたいものがある。ある人物を愛している……。それでも自分は犯罪者で、その人を傷つけ巻き込んでしまうから控え目な愛を……。赤椿の花言葉だ。椿の花言葉は「理想的な愛」と「謙遜」。ふたつの意味が相反している、面白い花だ。

だからイタチは赤椿の控え目な愛。なるほど。イタチの持っている指輪は「朱」だ。確かに釣り合わない事はない……。

ペインは知っていた。

イタチの愛する人物というのは、それは椿の花と同じように矛盾の狭間に立たされる運命にある人物。

一方は狂った憎しみを。

一方も狂った愛情を。

なんて、矛盾。なんて……悲劇。

ペインは口に酒を含むと、窓から見える月を見る。月は雲に今にも隠れそうになっていて、ペインの顔を照らす光は心もとない僅かな光だけ。雨が降っている。

自分で降らせた雨ではなくて、自然に降つてくる雨。

ふと、目にとまるのは月の僅かな光によつて照らされている紫陽花の花。ペインが居るのは矢の国の田舎宿。その一階から身を乗り出すようにして空を眺めていた。

「そついえば……」

昼間、小南が言つていた言葉を思い出す。小南は花が好きだが中でも紫陽花の花が好きだったという事はペインも知つていた。だが

ら稀に紫陽花の花を摘んで小南に渡す事があった。その度に小南は昔の笑顔を取り戻し、ペインはそれが内心嬉しかった。感情に出さないだけで。

『貴方は美しいが冷淡だ』

その言葉を聞いた時のペインは、少し後悔した。今まで自分の夢に付き合わせ過ぎたか、と。でも小南は笑つた。

『元気な女性』……そう言つて。

ペインはまた酒を口に含む。

今度また、紫陽花の花を摘んで来てやる。また小南の笑う姿が見たい……。

あの時の小南とイタチの姿が、昔の自分たちの姿によく似ていたから。

【朱】話「好きな花は」（後書き）

駄作だと思っていますがコメントよろしくお願いします。
イタチとサスケと見せかけておいて実は小南とペインとのお話。
またいつかペインと小南のお話を書いてみたいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6116f/>

暁に羽ばたく鷹の宿木

2010年10月10日13時23分発行